

そこで、兄弟たち。堅く立って、私たちのことば、手紙によって、教えられた言い伝えを守りなさい。 Ⅱテモテ2:15

## 2015(27)年 週 報

3月22日  
第4聖日  
第3396号

「罪過と罪よりの死」

聖  
言

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。  
エペソ2:1, 2

礼拝の恵み 第二〇章  
第八部 礼拝の障害  
第一節 我意

こうして神はこのさばきの行為によって、神を礼拝するには我意があつてはならないことを、はつきり示したもうた。礼拝は神がその御言葉のなかで与えたもうた指示と一致していなければならぬ。我意という「異火」は一瞬間も容赦されない。このことからして、だれ神を自分の勝手に礼拝することはできず、あるいは聖書に啓示されている神の啓示されていながら神の意志を無視して礼拝することはできず、そのような礼拝では神の認識は得られず、あるいはその礼拝は神に受け入れられないであろう、ということがわかる。我意は、それゆえに明らかに礼拝のそとにある。「異火」と焼香とどんなに上手に工夫しても、あるいは、それをささげる礼拝がどれほど立派であろうとも、神は御自分に「近づく者のうちに、わたしの聖なることを示し」ともう御方であり、また「すべての民の前に栄光を現わす」御方であるから、そのような礼拝は神から拒否される運命にある。神はいます、いますゆえに、「すべてのことにおいて第一の者であるゆえに、その神を礼拝するには、我意も自我表現も余地がないのである。」

(ギブス「礼拝」より)

イエス・キリスト聖成伝道教会・東洋聖書神学院・聖成基督教団

牧師 山本 稔 〒653-0812 兵庫県神戸市長田区長田町1丁目2番6号

電話：FAX (078) 691-1419 郵便口座番号 01170-3-20374

<http://jchec.org/>

minoru\_yamamoto@hotmail.co.jp メール m7-inoru@ezweb.ne.jp

二〇一五年三月八日午前一〇時 礼拝 山本牧師

「キリストを死者の中よりよみがえらせる」

物に仏教の歴史を映し出され、信徒を教育する。うらやましいかぎりである。ちょうどエペソに信者も当時有名なデュアナ女神の神殿があり、世界の港湾都市として栄えた。知識、物質、宗教の豊かさを誇っていた。それに比べて教会の貧弱さを恥じていたのでないか。それに対してパウロ励ましの手紙を書いた。

神様はすべての上にたつ、かしらであるキリストを教会にお与えにされました。それはキリストが十字架につけられ死んで黄泉にくだり三日目によみがえり、そして40日弟子に現れ、そして500人の弟子が見ているなかで昇天され、10日間120人の弟子が一緒に祈っていると聖霊が降臨し、教会ができました。

そのかしらであるキリストを教会に与えられました。私たちは各自からだの一部分である。教会はすべてのものをみたまの満ちているところです。ゆえにキリストと教会はからだのかしらと部分の関係であるならば、すべてのものをみたますお方は教会の中においてすべてをみたましてください。ゆえに、私たちの心の中にもはいり、わたしたちをキリストの満ち満ちた喜びよ感謝にあふれさせてくださる。そしてキリスト

御自身が現れるのでなく、キリストに満たされた、キリストの喜びにみたまされた私たちが組み合わされた体なる教会を通してすべてのものを満たすキリストが証される。だから、私たちの存在を通してキリストの名があがめられるか、もしくはキリストの名が汚されるか。である。

二〇一五年三月十八日午後七時 祈祷会 山本牧師

「ツロに対する宣告」(エゼキエル連講四四回)

「人の子よ。ツロはエルサレムについて『あはは。国々の民の門はこわされ、私は明け渡された。私は豊かになり、エルサレムは廢墟となった。』と言って、あざけった。」(エゼキエル二六ノ一)。

ツロは非常に興味深い町である。ツロはパレスチナの北の海岸から1キロほど離れた島の上に建てられたフェニキヤ人の港町で、地中海貿易で栄え、フェニキヤの町々の中では、最も豊かで強力であった。本土に従属する町々とかなりの領地を持ち、地中海の島々に幾つかの植民地と貿易港を持っていた。そのうえ貿易と防衛にもってこいの地の利であった。本土とは一本の土手道によってつながれているだけなので、陸から攻撃することとはほとんど不可能で、ツロが制海権を握っている限り、その町は安全であった。アッシリヤは全地を征服したが、ツロだけはその勢力を及ばせなかった。そのように繁栄と難攻不落を誇っていたツロに、主の審判が宣告される。主はツロに向けて、バビロンの王ネブカデネザルと彼につく多くの国々を、海の波が打ち寄せるように攻め上らせる。彼はツロに対して壘を築き、塹壕を掘り、城壁を破壊し、そのやぐらを取り壊し、民を剣で殺し、財宝を略奪し、商品を掠め奪い、家々を取り壊す。主は

そのようにしてそこを裸岩とし、海の中に網を引く場所とするといわれる(二二〜二四)。ツロはもともと海の岩島で「ツロ」と言う名も「岩」という意味であった。主はツロ岩をもう一度裸岩に戻されるのである。ヨセフオスによると、ネブカデネザルはエルサレムを陥落させた後、全力を傾けてこの島の要塞を攻撃したが、一三年間包囲し(前五八五〜五七三) ついに落とせなかった。そのことはエゼキエル自身の預言の中で「バプロンの王ネブカデネザルはツロ攻撃に自分の軍隊を大いに働かせた。それで、みな頭ははげ、みな肩はすりむけた。それなのに、彼にも彼の軍隊にも、ツロ攻撃に働いた報いは何もなかった。」(二九ノ一八)と言われて、ほめかされてる。ツロに關するエゼキエルの預言は成就しなかったように見える。しかししもの要塞も前三三二、アレクサンドロスの攻撃で完全に滅ぼされた。ツロがそのような審判を受けるのは、エルサレムの陥落のとき、「あはは。国々の民の門はこわされ、私に明け渡された。私は豊かになり、エルサレムは廢墟になった。」(二二)と言つてあざわらつたからである。「国々の民の門」とは、エルサレムが南北の交通路の要所に当たり、商人たちの立ち寄り場所、財の流れ込む町であつたことを指し、エルサレムの滅亡により、それまでのエルサレムに流れ込む利益をそっくりそのまま独り占めできるツロの喜びを表す。ツロは、商業上の競争相手であるエルサレムの陥落をひそかに喜んだのである。しかし主はそのような利己主義に対して審判を下された。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父からでたものではなく、この世から出たものである。」(「ヨハネ二ノ一六」と言つた。「この世への愛」であり、神への愛と真つ向から対立する。神は自分お幸福のために人の不幸を喜ぶような人に、同じような不幸を与えられる。エルサレムの滅亡を喜んだツロが自分も同じように滅びたように、ライバルの失脚を喜ぶ人は自分も失脚する。わたしたちはそのよ

うな神の裁きをおそれなければならぬ。イエスは、不幸に遭つた人たちのことを他人事のように話す弟子たちに「シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの18人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだつたとも思うのですか。そうではない・・・あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」(ルカ一三ノ四、五)。迫害する者の滅びを喜ばず、むしろ涙をもつてとりなしをされたイエス・キリストの愛を知るものである。私たちは「喜ぶものといつしよに喜び、泣く者といつしよに泣く」(ローマ二ノ一五)人が失敗したり、試みに遭つたりするとき、その人のために心からの同情をもつて神に祈り、とりなす者とならうではないか。ツロの滅亡は、多くの国々にシヨックを与えた。それはツロが繁栄の絶頂にあつたからだ。島々、つまり、ツロと貿易をしていた地中海沿岸の国々はツロの最期を見て、恐れ、身震いをしながら、次のような遣いか哀歌を唱える。(二七)。ツロは確かに地中海の真珠としてほめはやされた町であつた。かつてのベネチヤや現代のニューヨークのように、それは富と繁栄のシンボルであつた。世界中の宝を積んだ貿易船がその港に入港しては、富を落として行く。ツロはうぬぼれた。27:3, 28:2. 神はツロのたかぶりをへしおつた。詩篇一三八ノ六、箴言三ノ三四、ルカ一ノ五一〜五三、ヤコブ四ノ一〇)世界を制覇したアッシリヤは、主によつて国々をさばく「私の怒りの杖」(イザヤ一〇ノ五)と言われたが、高ぶつたためバビロンに滅ぼされる。ネブカデネザルは「私の僕」(エレミヤ二七ノ六)と呼ばれたが、誇つたため牛のように草を食むものとなる(ダニエル四ノ一八〜二三)ツロは主から「全きものの典型であつた。知恵に満ち、美の極みであつた。」(エゼキエル二八ノ一二)と言われたほど、主に喜ばれたが、高ぶつて主の裁きを受ける。(鷹取裕成著エゼキエル参考)